

ペリリュー島の戦訓として敵の上陸を阻止するには迫撃砲が一番効果的である。また砲兵工の仕事も簡単であるので野砲將校を特訓して迫撃砲大隊を編成した。編成に当っては三十歳以上の兵隊は原隊にもどし、二十歳代とこうたいさせたため、「突撃兵団」の称があった。

常磐兵団は敵が鹿島洋へ上陸の場合は第一線、九十九里と相模湾上陸の際は第二線と、戦闘序列が決まっていた。関東平野の中央で敵の爆撃に温存して出撃の際は利根川の盲杭を利用することになっていた。

昭和二十年八月十五日 那須野が原演習に出発直前ラ
ジオ放送で終戦の詔勅を聞く。

ただ最後まで残念だったことは、広島に原爆が投下されて迫撃砲弾を製造する兵器廠が焼失したため、実弾が最後まで入手出来なかったことである。

我々とはとにかく敵陣に突っ込んで死ぬ。「残った日本国民よどうか幸福に暮らして下さい」と念じつつ日々を送った。

昭和二十年九月三日、復員で自家へ帰る。帰路、常磐

線へ出て成田をまわって東京を避け、千葉の自宅へ帰着した。

行軍

愛媛県 正岡 建美

昭和十七年十二月現役兵として中国大陸に派遣され、昭和二十一年三月帰郷しました。

戦後四十五年以上たった今も忘れがたいものがあります。

揚子江をさかのぼり、武昌に上陸、湖北省及び湖南省等で苦戦をしたこともありましたが、今なお忘れることのできないこととして記憶に残っていますことは、昭和十九年の三月ごろ、原隊をあとに武昌にて師団勤務を命ぜられ、勤務をいたしましたが、約一か月たったころでしょうか、原隊に帰隊せよとのことでした。

そのころ原隊のいるところは、相当の奥地の前線とのことでした。少数部隊で四月上旬に帰隊することになり

ました。このころの戦況は、敵機の飛来などがあり大変悪化していました。武昌をあとにして前線へ、揚子江の南岸のほとりのぬかるみの道をしばらく行軍しました。

夜行軍がほとんどでした。長い雨期にはとくに苦労しました。途中、敵襲にあい重軽傷の犠牲者が出ました。

また包囲されたこともありましたが、運よく難をのがれ無事でした。

またじくざく行軍で広野から山道へ、山道から広野へ、広野から山道へ、さらに谷間の道へと、広野、山道、谷間道などを通り、奥地へ奥地へと行軍しました。時には夕方出発し一夜中行軍、翌朝みると、昨日夕方出発した場所を少し離れた向いの山の下の部落であったりしました。一夜の行軍にしてはあまりにも進んでいなかったわけです。

不なれな地形と夜行軍が多いのと、じくざく行軍などであまりはかどらなかつたのです。

昼間の行軍では、炎天下、大山等を越えたり、マラリヤ熱にやられながら行軍をしたことなどはいくどもありました。

後方との連絡等はいっさい切れ、食糧等もあまりありません。未熟の野菜で取り残りの小さいもの、食べられそうな小さい草等も食べました。食べ物には不自由しました。

食糧不足、汚水による下痢、睡眠不足、疲労などで栄養失調と同じように「あばら」骨の数がよくわかるようによせました。

出発してから約八か月ぐらいでしょうか。無事原隊に帰ることができました。あのとときの行軍は今なお記憶に残っています。

いろいろのことがありましたが、お陰にて元気で内地に帰りました。今なお大陸に多くの方々の戦死没者がいられることを忘れてはならないと思います。戦死没者の皆さんのご冥福を心からお祈りいたします。